生徒向け校長通信 ～ 名言にちなんだエッセイです

あうん　教師と生徒・保護者があうんの呼吸で教育ができることを願って‥‥

第　２１　号
令和４年２月２８日

みんなちがって、みんないい。

金子みすゞ『わたしと小鳥とすずと―金子みすゞ童謡集』

わたしと小鳥とすずと

わたしが両手をひろげても、
お空はちっともとべないが、
とべる小鳥はわたしのように、
地面（じべた）をはやくは走れない。

わたしがからだをゆすっても、
きれいな音はでないけど、
あの鳴るすずはわたしのように
たくさんのうたは知らないよ。

すずと、小鳥と、それからわたし、
みんなちがって、みんないい。

明日の卒業式を前に一遍の詩にまつわる話を紹介しようと思う。金子みすゞの「わたしと小鳥とすずと」。小学校の教科書にも掲載されている詩だから知っている人も多くいることと思う。今では誰もが知る金子みすゞだが、かつてその存在はほとんど知られていなかったことをご存知だろうか。

彼女の詩は、岩波文庫『日本童謡集』の中に一編だけ「大漁」が掲載されていた。その詩に感動した一人の青年が、他のものも読んでみたいと作者を追い求めたことから歴史は動き出す。

といってもたどりつくまで 16 年もかかった。ようやく青年はみすゞの実弟の上山雅輔さんに会うことが叶い、その手元に大切に保管されていたみすゞの自筆の三冊の手帳を手にすることになる。1982 年のことだった。２年後、『金子みすゞ全集』（JULA 出版局）が出版され、みすゞは 1930 年に 26 才の若さで亡くなってから、半世紀ぶりに甦ったのである。

青年の名は矢崎節夫さん。学生から児童文学作家に成長していた。僕にとっては矢崎先生。1986 年に先生の「児童文学研究」の講義を受けた。当時、金子みすゞという詩人を知る人などいなかった。「それ誰？」という反応の中で、先生の語るみすゞを探り当てる旅は、そこらへんのテレビドラマよりもドラマティックだった。そして、紹介されるみすゞの詩の素晴らしさ。どうしてこんなにやさしい視点に立てるのか。こんなにもやさしい人はこの世知辛い世の中で生きていけないのではないか。世間をよく知らない若造の分際でそう思ったものだ。事実、みすゞは家庭に恵まれず自ら命を絶っている。

矢崎先生は、自ら童話を書く際に絶対にしてはならないと誓っていることを、僕たちに語ってくれた。

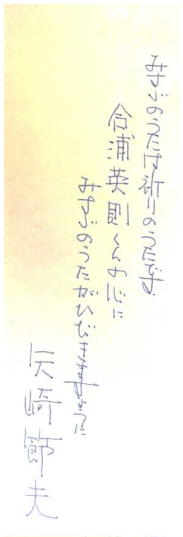
「たとえお話の中だとしても子どもに嘘をつかせたらダメ」

矢崎先生自身がものすごくやさしい心をもっていらっしゃる方なんだと思った。だから、たった一編の詩からみすゞの価値に気付いたのだ。

あらためて「わたしと小鳥とすずと」を読んでみる。

「みんなちがって、みんないい」

卒業生は４月からそれぞれの世界を生きることになる。「みんなちがって、みんないい」は、あなたはあなたでいいのだとやさしく背中を押してくれる言葉でもある。



大　漁

朝焼小焼だ
大漁だ。
大羽鰮（おおばいわし）の
大漁だ。

浜はまつりの
ようだけど
海のなかでは
何万の

鰮（いわし）のとむらい
するだろう。